

異世界マンガ作画大賞 課題作品 2（女子向け）

◆概要

天候をあやつる龍が存在する世界。舞台は帝都。
毒親のもと、妹と比べられ虐げられていた千代。
ついには厄介払いとして生贄に差し出される。

◆キャラクター設定（下記3名のキャラクターデザインを作成して下さい）

○瑞ノ江 千代（みずのえ ちよ）

18歳の娘。美代の双子の姉。髪はカラスの濡れ羽のような漆黒の直毛。目も黒。
大人しく真面目で誠実。しかし、娘を道具としか見ていない両親にとっては要領が悪く見える千代は無価値とされ、酷い扱いを受けてきた。
実はすべての龍を従える力を持つ『龍神』の生まれ変わり（＝『龍の巫女』）。

○鳴神 宗一郎（なるかみ そういちろう）

鳴神家の現当主で龍軍の総司令官。25歳。白銀の髪と紫水晶のような目を持つ美しい外見の美青年で、龍の中でも最強といわれる白龍を従えている。武器は特殊な日本刀。加えて白龍から力を得ており、自身も風や雷の術を使うことができる。
若くして当主になったため、自身に課せられた責任の重さから他人を拒絶するような言動が多く、冷酷だと思われがち。

○瑞ノ江 美代（みずのえ みよ）

18歳。千代の双子の妹。薄い色素の髪と目をした、勝気な顔立ちの美少女。
千代とは対照的に要領がよく世渡り上手。それゆえにずるいことも平気な口先だけの女。
快活で甘え上手かつ、両親にとって価値のある娘だったので、蝶よ花よと育てられた結果、自己中心的で高慢ちきな性格に。自分がちやほやされていないと許せず、千代のものを奪いたがる。

◆用語説明

○龍の巫女

龍神の生まれ変わりで、すべての龍を従える力を持つ。

生まれ変わりを家に迎えた一族は栄えるため、末裔たちは巫女を探している。

○龍

龍神の神使。あまねく水のある場所に棲んでおり、大きさも力の強さも様々。

力の強い龍には天候を変える力がある。

○黒龍

暴風雨を引き連れて移動する災厄。黒龍が通過したあと、残るのは瓦礫の山。

○龍軍

守護の龍を従え、黒龍を駆逐し帝都を守る。龍神の末裔の華族『龍族』の当主だけで構成された軍隊。龍族の家についた龍はその子々孫々を守り、当主には同時に異能の力を与える。

◆課題小説

(以下から一部シーンを抜粋して、マンガ 4-8P 分の完成原稿を仕上げてください)

崖の上にある荒廃した龍神の社に、千代はひとり閉じ込められてしまった。社の清掃をしろと両親に命じられ中に入った途端、外から扉に門をかけられたのだ。

「お社の掃除は嘘よ」

暗闇の中の千代からは見えないが、扉の外で、妹の美代は笑っているようだった。嬉々とした口調で話している。

「あんたみたいな陰気な女と双子だなんて、私の人生の汚点よ。お父様とお母様も、厄介払いができるって喜んでいるわ。

だから、ここで消えてちょうだいな。『お姉様、?』

千代は愕然とした。

妹から初めて姉と呼ばれた。そう呼ばれたかった……だが、こんな形を望んだわけではない。

閉じた扉の向こうから、憎しみを籠めてささやく美代の声が聞こえた。

「龍に生贄を捧げれば災厄を除けられる。あんただって知ってるでしょう？ 家が助かるし、周りの人も助かるわよ。それくらいの役には立ちなさいな」

その言葉を最後に、扉の前から美代の気配が遠退く。

一緒に来ていたはずの両親の気配もない。耳を澄ませど聞こえるのは、草木を揺らし、社の隙間から吹き込む風の音だけ。

千代は、社にひとり取り残されてしまった。

「そんな……」

暗闇の中、千代の頬を涙が伝った。

自分は家族に捨てられた、必要なかった……そう思い知らされたからだ。

(……でも、最期にお父様とお母様のお役に立てる。黒龍の被害から、この辺りの人たちも助けられる。私の命は、無駄じゃない……決して、無駄じゃ——)

千代は、己にそう言い聞かせようとした。ここから脱出し生きることが諦めようとした。だが、

「——……嫌」

ぽつり、と千代の唇から声が零れ落ちる。

それは、己の置かれた不遇の状況に対し、千代が初めて口にした拒否だった。

(まだ、死にたくない)

暗闇の中で俯いていた千代は、顔を上げた。そして、固く閉ざした扉に抗う。

「開い、て……お願いっ……」

両手で、肩で、精一杯の力を込めて扉を押す。しかし、扉はびくともしない。社の中を見回せど、他に抜け出せるような場所もない。

(どうしよう。このままじゃ、黒龍が——)

その時、ごうっ、と外で突風が唸る音がした。

扉の隙間から吹き込む風に、千代の髪や着物の裾が翻る。

ガタガタ、と社は小刻みに揺れていたが、やがて風の強さと揺れによって門が外れた。

吹き荒れる風の力で、ひとりでに扉が開く。

暗闇に慣れた千代の目に、外の光は眩かった。だが、ぼんやりとした視界の中に何がいるのかは理解できた。

社の前に降り立ったその存在に、千代は呆然と呟いた。

「黒、龍……」

社よりも大きい、雨雲を集めたような黒い龍。それは、暴風雨を伴い、通過した土地を瓦礫の山に変えてしまう『災厄』と呼ばれる存在だ。

黒龍のそのぎらついた双眸が千代を捉えた。

(食べられるっ……)

千代はいよいよ観念した。ギュッと目をつぶる。

だが、いくら待てども、一向に襲われる気配がない。

(……………あれ?)

薄目を開けて、千代は黒龍を見た。

黒龍は、千代をじっと見つめたまま、静かにそこに佇んでいた。社を取り巻いていた暴風雨も、心なしか弱まっている。

なぜ、と千代は疑問を覚えた。だが、それよりも、

(今なら!)

千代は開け放たれた扉から、社の外にまろび出るように飛び出した。

黒龍は千代に視線を向けたまま、だが、じっとして動かない。黒龍を避けるように鳥居を目指し、千代はびしょ濡れになりながら風雨の中を懸命に走る。

しかし、途端にその足元の地面がガラッと崩れ落ちた。

「え」

千代の身体は、気づけば宙に放り出されていた。

暴風雨を伴う黒龍の襲来により、境内の一部が崩落しかけていたのだ。千代は、その崩落に巻き込まれたのである。

「あ——」

掴める物など何もない。助けてくれる者もない。それなのに——反射的に、千代は天に向かって手を伸ばしていた。

不意に、白い何かが、千代が伸ばした手の先に見える。

それが何かを理解する前に、千代は何者かに手を掴まれた。

「——!？」

落ち始めてから、わずか一秒。

強い力で宙に引き留められた千代は、驚きに目を見開く。

そして、自分を滑落から助けた相手確かめる。

軍服をまとった美しい男だ。

白銀の髪に、涼し気な眼差し。気品を漂わせたその男は、傍らに真っ白な龍を従えて宙に浮いていた。その摩訶不思議な飛翔は、白龍の加護の力で可能になっている。

男は軽々と千代を引き上げると、その腕に抱き留めた。細身に見える男だが、その腕は揺るぎなく力強い。

彼は出会ったばかりの千代を見つめて、唐突に尋ねるのだった。

「お前は、龍の巫女か？」